

夏期福音特別集会(3)(箱根湯本)

隠れています神

――イザヤ書第44章、45章――

1982年8月21日

小池辰雄

今聞け 拝一神 なんじ我にかえれ ドラマティッシェ・ハルモニ― 雲よ義をふらすべし
神はなんじの中にいませり 一極絶対 隠れたるに在す汝の父 反対の中に隠されている 平
伏しの無実実存 ただキリスト一切

【イザヤ44】

1されどわが僕ヤコブよわが撰みたるイスラエルよ今きけ 2なんじを創造
しなんじを胎内^{はらのうち}につくり又なんじを助くるエホバ如此^{かく}いたもう わがしも
ベヤコブよわが撰みたるエシュルンよおそるるなかれ 3われ渴けるものに水
をそそぎ 乾^ひたる地に流れをそそぎ わが霊^{みたま}をなんじの子輩^{こら}にそそぎ わが恩恵^{めぐみ}
をなんじの裔^{すえ}にあたうべければなり 4斯てかれらは草のなかにて川のほとり
の柳のごとく生えそだつべし。 5ある人はいふ我はエホバのものなりと。あ
る人はヤコブの名をとえん。 ある人はエホバの有^{もの}なりと手にしるしてイス
ラエルの名をなのらん。

6エホバ、イスラエルの王イスラエルをあがなうもの万軍のエホバ如此い
いたもうわれは始^{はじめ}なりわれは終^{おわり}なりわれの外に神あることなし。 7我いにし
えの民をもうけしより以来たれかわれのごとく後事^{このこと}をしめし又つげ又わが前
にいいつらねんや。 試みに成らんとすること来らんとすることを告げよ。
8なんじら懼^{おそ}るるなかれ憎^{おの}くなかれ、我いにしえより聞かせたるにあらずや、
告げしにあらずや、なんじらはわが証人なり、われのほか神あらんや、我の
ほかには磐^{いわ}あらず、われその一つだに知ることなし。

9偶像をつくる者はみな空しく、かれらが慕うところのものは益なし。そ
の証をするものは見ることなく知ることなし。 斯るがゆえに恥をうくべし。
10たれか神をつくり又えきなき偶像を鑄たりしや。 11視よその伴侶^{ともがら}はみなはじ
ん。その匠^{たくみ}工^{たくみ}らは人なり。 かれら皆あつまりて立つときはおそれてもろとも
に恥るなるべし。

12鉄匠^{かなだくみ}は斧をつくるに炭の火をもてこれをやき鎚^{つち}もてこれを鍛えつよき腕
をもてこれをうちかたむ。 飢えれば力おとろえ水をのまざればつかれはつべ



し。¹³木匠はすみなわをひきはり朱にてえがき鉋にてけずり文回をもて描き、之を人の形にかたどり人の美しき容にしたがいて造り、而して家のうちに安置す。¹⁴あるいは香柏をきり、あるいは櫟をとり、あるいは樞をとりあるいははやしたきぎの樹のなかにて一をえらび、あるいは杉をうえ雨をえて長たしむ。¹⁵而して人これを薪となし之をもておのが身をあたため又これを燃やしてパンをやき、又これを神につくりておがみ偶像につくりてその前にひれふす。¹⁶その半ばは火にもやしその半ばは肉をにて食い、あるいは肉をあぶりてくいあき、また身をあたためていう、ああ我あたたまれり、われ熱きをおぼゆ。¹⁷斯てその余りをもて神につくり偶像につくりて、その前にひれふし之をおがみ之にいのりていう、なんじは吾が神なり我をすくえと。

¹⁸これらの人は知ることなく悟ることなし。その眼ふさがりて見えず、その心としてあきらかならず。¹⁹心のうちに思うことをせず、智識なく明悟なきがゆえに、我そのなかばを火にもやし、その炭火のうえにパンをやき肉をあぶりて食い、その木のあまりをもて我いかで憎むべきものを作るべけんや。我いかで木のはしくれに俯伏すことをせんやという者もなし。²⁰かかる人は灰をくらい、迷える心にまどわされて己がたましひを救うあたわず、またわが右手にいつわりあるにあらずやとおもわざるなり。

²¹ヤコブよイスラエルよ此等のことを心にとめよ、汝はわが僕なり、我なんじを造れり、なんじわが僕なり、イスラエルよ我はなんじを忘れじ。²²我なんじの愆を雲のごとくに消し、なんじの罪を霧のごとくにちらせり。なんじ我にかえれ、我なんじを贖いたればなり。²³天よ、うたえ。エホバのこゝとを成したまえり。下なる地よばわれ、もろもろの山よ林およびその中の木よこえを発ちてうたうべし。エホバはヤコブを贖えり。イスラエルのうちに栄光をあらわし給わん。

²⁴なんじを贖いなんじを胎内につくれるエホバかく言いたもう。我はエホバなり、我よろずのものを創造し、ただ我のみ天をのべ、みずから地をひらき、²⁵いつわるもの予徴をむなくし、卜者をくるわせ、智者をうしろに退けてその知識をおろかならしむ。²⁶われわが僕のことばを遂げしめ、わが使者のはかりごとを成らしめ、エルサレムについては民また住まんといい、ユダのもろもろの邑については重ねて建てらるべし我その荒廃たるところを旧にかえさんという。²⁷また淵に命ず、かわけ我なんじのもろもろの川をほさんと。²⁸又クロスについては彼はわが牧者すべてわが好むところを成らしむる者なりといい、エルサレムについてはかさねて建てられその宮の基すえられんという。



【イザヤ45】

1 われエホバわが受膏者クロスの右手をとりてもろもろの国をそのまゑに降らしめ、もろもろの王の腰をとき、扉をその前にひらかせて門をとずるものなからしめん。2 われ汝のまゑにゆきて崎嶇^{けわしき}をたいらかにし、銅^{あかがね}の門をこぼち、くろがねの關木^{かんのき}をたちきるべし。3 われなんじに暗きところの財宝^{たから}とひそかなるところに蔵せるたからとを^{あた}予え、なんじに我はエホバなんじの名をよべるイスラエルの神なるを知らしめん。4 わが僕ヤコブわが撰^{えら}みたるイスラエルのために我なんじの名をよべり。汝われを知らずといえどわれ名をなんじに賜^{たま}いたり。5 われはエホバなり。我のほかは神なし、一人もなし。汝われをしらずといえども我なんじを固^かうせん。6 而して日のいづるところより西のかたまで人々我のほかは神なしと知るべし。我はエホバなり他にひとりもなし。7 われは光をつくり又くらきを創造す。われは平和をつくりまた禍害^{わざわい}をそうぞうす。我はエホバなり。我すべてこれらの事をなすなり。

8 天ようえより滴^{したた}らすべし、雲よ義をふらすべし。地はひらけて救いを生じ、義をもともに萌^{もえ}いだすべし。われエホバ之を創造せり。

9 世人^{よのひと}はすえもののの中のひとつの陶器^{すえもの}なるに己をつくれる者とあらそうはわざわいなるかな。土塊^{つちくれ}はすえものつくり^{つくり}にむかいて汝なにを作るかというべけんや。又なんじの造りたる者なんじを手なしというべけんや。10 父にむかいて汝なにゆえに生むことをせしやといい、婦^{おんな}にむかいて汝なにゆえに産みのくるしみをなししやという者はわざわいなるかな。

11 エホバ、イスラエルの聖者イスラエルを造れるもの如此^{かく}いいたもう。後きたらんとすることを我にとえ、またわが子女^{こら}とわが手の工^{わざ}につきて汝等われに言わせよ。12 われ地をつくりてそのうゑに人を創造せり。われ自らの手をもて天をのべ、その万象をさだめたり。13 われ義をもて彼のクロス^かを起こせり。われそのすべての道をなおくせん。彼はわが邑^{まち}をたてわが俘囚^{とらわれびと}を^{みことば}の^{みことば}のためならず報いのためならずして^{ゆる}釈すべし。これ万軍のエホバの聖言なり。

14 エホバ如此^{かく}いいたもう、エジプトがはたらきて得しものとエテオピアがあきないて得しものとはなんじの有^{もの}とならん。また身のたけ高きセバ人きたりくだりて汝にしたがい繩につながれて降り、なんじのまゑに伏しなんじに祈りていわん、まことに神はなんじの中にいませり、このほかに神なし一人もなしと。15 救をほどこし給うイスラエルの神よ、まことに汝はかくれています神なり。16 偶像をつくる者はみな恥をいだき辱^はかしめをうけ、諸共にはじあわてて退かん。17 されどイスラエルはエホバにすくわれて永遠の救いを



えん。なんじらは世々かぎりなく恥をいだかず辱かしめをうけじ。

18 エホバは天を創造したまえる者にしてすなわち神なり。また地をもつくり成してこれを堅くし徒然にこれを創造し給わず、これを人の住所につくり給えり。エホバかく宣給う、われはエホバなり、我のほかに神あることなしと。19 われは隠れたるところ地のくらき所にて語らず、我はヤコブの裔になんじらが我をたずぬるは徒然なりといわず、我エホバはただしき事をかたり直きことを告ぐ。

20 汝等もろもろの国より脱れきたれる者よ、つどいあつまり共にすすみきたれ。木の像をにない救うことあたわざる神にいのりするものは無智なるなり。21 なんじらその道理をもちきたりて述べよ、また共にはかれ、此事をたれか上古より示したりや。誰かむかしより告げたりしや。此はわれエホバならずや、我のほかに神あることなし。われは義をおこない救いをほどこす神にして我のほかに神あることなし。22 地の極なるもろもろの人よ、なんじら我をおおぎのぞめ、然らばすくわれん。われは神にして他に神なければなり。23 われは己をさして誓いたり。この言はただしき口よりいでたれば反ることなし。すべての膝はわがまえに屈み、すべての舌はわれに誓いをたてん。24 人われに就いていわん正義と力とはエホバにのみありと。人々エホバにきたらん、すべてエホバにむかいて怒るものは恥をいだくべし。25 イスラエルの裔はエホバによりて義とせられ且つほこらん。

●今聞け

イザヤ書44章から入ります。

1 されどわが僕ヤコブよわが撰みたるイスラエルよ今きけ

ヘブライ語では

「今聞け」

と一番先に出てくる。これは本当はもつと詩的に訳さなければいけない。日本語というのはどうもそういうところが散文的になってしまふ。預言者の言葉は音楽でもあるし、詩でもあるし、言葉と言葉との間にまたその奥にグーッと響きがきいている。

なんじを創造しなんじを胎内につくり又なんじを助くるエホバ如此いたもうわがしもべヤコブよわが撰みたるエシユルンよおそるるなかれ

「わが僕」「わが撰みたる」と畳みかけて繰り返している。これでもかこれでもかというわけです。「エシユルン」とはイスラエルと同じことです。

3 われ渴けるものに水をそそぎ乾たる地に流れをそそぎわが霊をなんじの子輩にそそぎわが恩恵をなんじの裔にあたうべければなり



「水」と「霊」は同じことです。聖霊は水に例えられる。聖霊こそが「恩恵」なんです。ヘブライ語の詩は非常に対句になっている。そういうところは漢詩と似ています。同じことを別な言葉で言い換えては具体的にうちこんでいるわけです。

⁴斯^{かく}てかれらは草のなかにて川のほとりの柳のごとく生えそだつべし。

こういう言い方はエレミヤ記にも詩篇にも出ています。川のほとりの柳の木というのは非常に青々と生き生きと茂りますから。

⁵ある人はいは我はエホバのものなりと。ある人はヤコブの名をとえん。

ある人はエホバの有^{もの}なりと手にしるしてイスラエルの名をなのらん。

「ヤコブの名をとえん」とか「イスラエルの名をなのる」ということは、エホバのものととしてのヤコブ、エホバのものととしてのイスラエルということです。これも素晴らしい対句になっています。「神の有^{もの}」ということ。

結局ここで、イザヤを通して言わんとするところの啓示の言葉の中心は「^{みたま}霊」です。これに応ずるものはイザヤ書59章に出てきます。それは水でもあるし、あるところでは火でもある。ヨエル書になると火になる。

● 拝一神

⁶エホバ、イスラエルの王イスラエルをあがなうもの万軍のエホバ如此い
いたもうわれは始^{はじめ}なりわれは終^{おわり}なりわれの外^{ほか}に神あることなし。

エホバは王者であり贖主である。

「^{はじめ}始なり、^{おわり}終なり」

とは、

「リーション、アハローン」

という言葉です。

イスラエル・ヤコブに対しては徹底的な拝一神です。全世界に対しては唯一神です。拝一神というのは、神とイスラエルの関係が一對一である、比較を絶した関係であるということです。これがはつきり実存的に立たないと、いくら唯一神なんて言ったって、これは単なる理念になってしまう。観念・理念になって、そんな唯一神なんて言ったってしょうがない。本当の拝一神は、他の神々があるうが、もうそんなことは問題でなくて、これがずーつとひろくなってしまう。それが自然に唯一神に展開していく。観念的に頭でもって、

「世界は唯一神でなければならぬ」

なんて、そんな考えかたをしているのではない。

母親はたくさんいらつしやるけれども、小さな子供にとってはお母さんは世界に一人しかない。そういうようなことが実存的な自覚の世界です。それから突き抜けていく。何も比較をしなくても、自分のお母さんは世界一だと思う。それが本当の信賴の姿です。



エホバはイスラエルの王者である。また、全世界では王の王ということになる。イスラエルを贖うものが今度は全世界を贖うものになる。みな展開してしまう。その実存的な関係の実質が凄いから、イスラエルの宗教は真に世界宗教になった。キリストによって突き抜けてしまった、大包摂になってしまった。宇宙を抱きたもうキリストであるからです。

7 我いにしえの民をもうけしより以来たれかわれのごとく後事をしめし又つげ又わが前にいいつらねんや。試みに成らんとすること来らんとすることを告げよ。

これは預言の神であるということです。

8 なんじら懼るるなかれ^{おそ}懼くなかれ、我いにしえより聞かせたるにあらずや、告げしにあらずや、なんじらはわが証人なり、

神さまの預言というのは、その時代に対するところの、言葉の一番深い意味における批判です。それと同時に今度は、未来に対するところの預言もふくむ。「ナーバー」というのは、そういうような霊的な響きをもつて伝える者です。その伝えられているものを

「ネービーム(預言者)」「(複数)

という。神さまの預言は必ず成る。キリストは

「神の国がもう近づいてきた」

と仰った。その「近づいてきた」というのは質的な意味であつて、決してただ時間的に仰っているわけではない。キリストが来られてからもう二千年もたってしまった。延びれば延びるほど審判の度合いは強くなる。恐ろしいです、神への背きがいよいよはなはだしくなってくるから。

われのほか神あらんや、我のほかには^{いわ}磐あらず、われその一つだに知ることなし。

これは非常にはつきりした徹底的な言葉です。

●なんじ我にかえれ

9 節からあとは偶像のことがたくさん書いてある。

「神ならば救え。ひとつも救うことがないではないか。偶像が救ったためしがあるか」

と言っているわけです。

18 これらの人は知ることなく悟ることなし。その眼ふさがりて見えず、その心としてあきらかならず。

偶像を相手にしている者はそんなものだという。

21 節から23 節がまた大事なところです。

21 ヤコブよイスラエルよ此等のことを心にとめよ、汝はわが僕なり、我な



んじを造れり、なんじわが僕なり、イスラエルよ我はなんじを忘れじ。²²我なんじの愆^{とが}を雲のごとくに消し、なんじの罪を霧のごとくにちらせり。なんじ我にかえれ、我なんじを贖^{あがな}いたればなり。

イザヤ44章22節は一番著しい言葉の一つです。日本語では

「雲散霧消」

という。我々の罪咎^{つみが}は雲散霧消して、晴々としてしまった。

「もう、汝の罪は思い出さない」

と43章にありました。

「なんじ我にかえれ、我なんじを贖いたればなり」

とは

「私に帰ってこい、贖ったから帰ってこい」

ということ、で、「帰ってきたら贖うよ」ではない。

「もう贖った。お前は全部、私は引き受けてしまった。もう問題はない。問題が山積しようが、またこれからいくらあろうが、そんなことは問題ではない」

と、全部贖いとられた。過去も現在も未来も、私は贖いとられている。こんなありがたいことはないではないですか。

「わが過去はどうであつたか、現在がどうであるか、未来はどうなりそうか」

なんて、そんなことはどうでもいい。全部、贖いとられた。過去完了、現在完了、未来完了です。それをこの現在において受けとるところに貫いた永遠というものが来ている。

「お前は永遠に贖われてある。死んでも死なない。罪は雲散霧消した。そんなものは雲のようにいくらかかっても、成層圏には罪の雲も霧もない。お前はもう成層圏に入れてやったんだ」

と。ジェット機で雲の上にとると、雲海が下の方にたくさんある。あれを見たら、罪咎の姿だと思えばいい。そんなものは乗り越えてしまつて進んでいる。そういう世界に、そういう現実に入られている。

「我はなんじの愆を雲のごとく消し、なんじの罪を霧のごとくに散らした。もう贖

ったから、心配なしに帰ってこい。我に帰入せよ」

ということ、です。預言者の帰入、使徒たちの回帰、これは「悔改^{くいあらため}」という言葉です。「悔い

改めよ」ではない。

「帰り来たれ、帰り入れ。身を回^{めぐ}らして帰ってこい」

ということです。「天国は近づきたり。汝ら悔い改めよ」とは、

「天国体なる私がこうしてやって来たぞ。横を見るな、自分を見るな、私を見る。見るばかりでなくて、ここに帰って来い」

ということ、です。普通は「回心」とか「悔改」とか言っているけれども心だけではダメです、



全身で帰らなければ。だから、私は

「回帰」

と言っている。

「全存在をもつてそこに帰り行け」

ということ。どこまでも行動的なんです。単なる心理的なことではない。プロテスタント信仰の非常に心理的な、あるいは観念的なところをぶち破って、聖書のもっと実存的な行動的な信仰の世界に入っていかなければいかん。預言者も使徒たちも皆そうです。新しい宗教改革は誰かがやるのではない。私たち一人ひとりがやっていくんです。

預言者が、

「選ばれたる者よ、僕よ。忘れないで、帰り来たれ。もう贖ったぞ、救ったぞ」

と畳みかけて言っているのは、これはイザヤを通して私たちに言っているわけです。みなキリストの言葉です。ルターは「エホバ」という言葉を「キリスト」という気持ちで読んでいた。その点はさすがにルターです。彼のドイツ語の聖書がなぜ力があるかという、彼はそういった霊的な現実で訳していたからです。その後から学問的にはより正しい訳ができて、聖書の言葉の本当の響きを伝えていることにあつては、ルターにかなわない。いわゆる文法的に語学ができすぎると、反って言葉にこだわって、本当の言葉の響きが受けとれなくなる。

イザヤ44章22節は大変楽しいありがたい言葉です。もう帰り行かざるを得ない。喜び勇んで入っていく。歩けないと思つたら歩きだした、走れないと思つたら走りだしたというわけです。

²³天よ、うたえ。エホバこのことを成したまえり。下なる地よばわれ、もろもろの山よ林およびその中の木よこえを^{はな}発ちてうたうべし。

預言者というのは、霊の世界にはいると、自然の姿が光つてきて、そしてそれが響いてくる。だから、こういうことを言っている。ただ文学的に言っているのではない。木も草も石も鳥も空の星もみな神を讃美するためにある。詩篇148篇みたいに。

エホバはヤコブを贖えり。イスラエルのうちに栄光をあらわし給わん。

「ヤコブ」と「イスラエル」は同じことです。

「ヤコブ・イスラエルを贖ったので必ずそのヤコブ・イスラエルのうちに栄光を現したまわん」

という、預言者のこういう言葉はみなキリストが私たちに呼びかけている言葉として読まなかつたらつまらないですよ。聖書はドラマであつて、そのドラマの中に自分を入れて、我と汝の一人称二人称で読んでいかないとね。

²⁴なんじを贖いなんじを胎内^{はらのうち}につくれるエホバかく言いたもう。我はエホバなり、我よるずのものを創造し、ただ我のみ天をのべ、みずから地をひらき、



25 いつわるものの予徴^{しるし}をむなくし、^{うらなうもの}卜者をくるわせ、^{かしこきもの}智者をうしろに退けてその知識をおろかならしむ。
そういった人間的な知や占いはダメだと。これはパウロがコリント前書の始めの方で言っているのと同じことです。

「知者いずこにかある、学者いずこにかある。この世の論者いずこにかある。天的な知がきたらもう次元が違う」

とパウロが言っている。哲学の本当の本学に入らないとね。

●ドラマティッシェ・ハルモニー

イザヤ書45章に入ります。

1 われエホバわが受膏者クロスの右手をとりてもろもろの国をそのまえに降らしめ、もろもろの王の腰をとき、扉をその前にひらかせて門をとずるものなからしめん。² われ汝のまえにゆきて崎嶇^{けわしき}をたいらかにし、^{あかがね}銅の門をこぼち、くろがねの^{かんのき}關木をたちきるべし。³ われなんじに暗きところの財宝^{たから}とひそかなるところに^{かく}蔵せるたからとを^{あた}予え、なんじに我はエホバなんじの名をよべるイスラエルの神なるを知らしめん。⁴ わが僕ヤコブわが^{えら}撰みたるイスラエルのために我なんじの名をよべり。汝われを知らずといえどわれ名をなんじに賜いたり。⁵ われはエホバなり。我のほかには神なし、一人もなし。汝われを知らずといえども我なんじを固うせん。

畳みかけて言っている。お前には分からなくても大丈夫だ、こっちから堅くすると。
⁶ 而して日のいづるところより西のかたまで人々我のほかに神なしと知るべし。我はエホバなり他にひとりもなし。⁷ われは光をつくり又くらきを創造す。われは平和をつくりまた^{わざわい}禍害をそうぞうす。我はエホバなり。我すべてこれらの事をなすなり。

このような言葉に躓かないようにしてください。

「光も闇も平和も災いもみな私がドラマティックに回転してやっているんだ」

と。

「ドラマティッシェ・ハルモニー」(劇的調和)

という。非常にドラマティックな内容をもったところの大きなハルモニーです。このことはやはり偉大な音楽家や文学者はそれを知っている。ゲーテなんか正にそうです。

「ペストや災害があるのも神さまの世界だ。私はそれを全部、肯定する」

とゲーテは言いました。「愛」というと、神学者が「アガペー」「フィロース」「エロース」なんていつてすぐ分類する。ゲーテはそんな分類はしない。

「愛は全部、神から来ている。それが恋愛にもなれば、夫婦愛にもなれば、師弟愛



にもなれば、友情にもなれば、友のために己をすてる犠牲の愛にもなる。愛は千変万化してはたらくが、それはみな神さまから来ている」

と。ゲートというのはそういう大きな把握の仕方をする。彼は無限無量なものをつかまえさせられて、それを自由に表現している。メタモルフオーゼを、変質変貌を起こしている。元は一つなんだ。

「植物がたくさんあつてもそこに根元の植物(ウル・プランツエ)があるはずだ。花

も葉からメタモルフオーゼを起こしたものだ」

とゲートが言っている。

そういう大きな有機体的な構造の大ハーモニー、コスモス、宇宙です。「それでは全部、無差別ではないか」なんて、そうではない。差別における無差別というものを見なければダメです。これはまた禅宗の方にも通ずるものをもっていますけれども。

「光を創造しまた暗きを創造する」

とある。もし、しょっちゅう昼間だけだったら、我々は眠れない。地球がグルグル回転して、光と闇、昼と夜が繰り返す。そういった光と闇、平和と禍害ということ。ゲートの『ファウスト』にも出てくるが、サタンをも神さまは使っている。人間は、サタンが時々誘惑してやらないと、それと戦うことを知らないで、自分で悪いことをしたりする。いろいろな意味においてサタンも役に立つ。神さまとサタンとは並列ではありませんよ。サタンはもちろん手下で、このサタンにキリストは勝ったんだ。サタンは悪霊だからキリストは神の霊で勝った。

皆さん、恐くないですよ、「主さま!」ということが空念仏でなかったら、必ずサタンに勝ちますから。ルターの宗教改革の歌の中に、

「小さな言葉がサタンを倒す」

という句がある。「小さな言葉」とは「キリスト」「十字架」「聖霊」という言葉です。そういった小さな言葉を称えようと、サタンは逃げていってしまふ、倒れてしまふ。だから、

「主さま!」

と称える。仏教だったら、

「南無妙法蓮華経」

「南無阿弥陀仏」

と言う。日蓮が龍の口で斬られそうになった時に、彼は「南無妙法蓮華経!」と称えたら、斬ろうとした奴がぶつ倒れた。日蓮にかかっている霊に撃たれたわけです。そんなことは歴史的にどうだなんて言わなくなつて、もうはつきり分かります。日蓮というのも凄い。あの「波題目」というのも本当ですよ。法然、親鸞とか、ああいうのが「南無阿弥陀仏!」と称えれば、それは力をもっていますから。百万遍しなくていいんです、一遍で。

私たちは、



「主さま、アーメン！」

と言う。これが一番簡単な、一番力強い祈りになる。「祈れない」なんてことはひとつもない。皆さん、祈りは「主さま、アーメン！」でいい。本当に全身を投げかけて、もう自分は問題でない。

「主さま、アーメン！ ハレルヤ！」

でいいんだ。そうすると、

「いや、全く知りませんでした。こういう世界がありましたか」

と自分で気がつくから。全身が痺れるぞ。

そのように、はつきりと次元の違ったものを体験せしめられる。そうすると、もうこっち側がどうであるかどうかは問題でない。

「聖霊を受けたくせに、こうではないか」

なんて、人に何を言われたって、そんなことではない。これは否定するわけにはいかない。だから、聖霊はなにものとも代えることはできません。十字架と聖霊は何ものとも代えることができない。それが楕円の二焦点だと言っているわけです。

だから、どのようなことになりました。我々一人ひとり自身がドラマティックな現実である。また社会が、国家が、世界がそうです。そのような混沌たるドラマティックの中に、そこを貫いて神さまの力は働き、神さまは大きくこれを支え担い包む、という世界であります。突破から包摂になるわけです。

●雲よ義をふらすべし

8 天ようえより^{したた}滴らすべし、雲よ義をふらすべし。地はひらけて救いを生じ、

義をもともに萌^{もえ}いだすべし。われエホバ之を創造せり。

こういう言葉はちよつと普通は分らない。「義」という言葉や「救い」という言葉は抽象的な言葉でしょ。しかし、抽象的な言葉はユダヤ人には決して抽象ではない。

「雲よ義をふらすべし。地はひらけて救いを生じ、義をもともに萌えいだすべし」

とは何のことですか。上から義がグーッと降りてこいと。それが救いで、下からもまたそのような義が生えていくようにと。そういった具体的な魂の姿、存在の姿を「義」と言ったり、「救い」と言ったりする。そういうような内容をもった、内実のある響きを受けとっていないと、こういう言葉は読めない。すぐ、観念になったり理念になったりする。

ここで大事なのは、「義」という言葉と「救い」という言葉が一つである。これは第二イザヤの大事な性格です。ルターはこのことに始めは躓いた。義はただ審くものかと思っていた。ところが、義はまた救いの別の言葉であった。

神さまと人との関係が垂直に立つ縦の関係が義のすがたです。この関係がはつきり立つ



て、神さまと結んでいる。これを

「宗教」(レリギオ、再結)

という。これが切れていたのを結び付ける。それはこういうようにするものは神さまの力が、神の義がする。そうなったら、その姿が救いなんです。

親子の関係でも、師弟の関係でも、「はいっ」ということがはつきり言えないようなことではダメなんです。そういう魂の姿勢というものが大事です。イスラエルの宗教はその点で非常にはつきりした背骨をもっている。脊椎骨が立つことが救いなんです。

アブラハムがエホバに向かつて「はいっ」と言いました。これが

「アーメン」(はいっ、然り)

なんです。そしたら、エホバはこれを「義」となした。それはこの縦の関係が立ったからです。これが信仰の姿であるとパウロが言った。

「アブラハム、エホバを信す」

という「信ずる」という言葉がまた非常に蹟く言葉です。

「アブラハムはエホバに『はい』(アーメン)と言いました。そしたら、神さまは『よ

し』(義)と仰った」

と、それでいい。親や先生に「よし」と言われたら、言われた方は何か生命がかかってくるような、そういう間柄です。それが救いなんです。この救いというのはあまつたれることではない。

9 世人はすえものの中のひとつの陶器なるに己をつくれる者とあらそうは

わざわいなるかな。土塊はすえものつくり^{つちくれ}にむかいて汝なにを作るかという

べけんや。又なんじの造りたる者なんじを手なしというべけんや。

これはエレミヤも言ってますが、我々は造られたもの、被造物で、造られたものが造り主に對してどうのこうのと言えるかという。

10 父にむかいて汝なにゆえに生むことをせしやといい、婦にむかいて汝なに

ゆえに産みのくるしみをなししやという者はわざわいなるかな。

ところが、この頃はこんなことを言うのがあるんだ、

「頼みもしないのに生んだ」

なんて。昔からそういうのがいたとみえる。

「私はでき損ないです」

なんて思うことはない。みな、神さまは一人ひとりを天下一品につくっている。

私は「落ちこぼれ」という言葉は大嫌いです。ああいう言葉を教育者が使うとはしょうがない。一人ひとりは大変な素質をいただいている。なにも学校に入ることが人間をつくることではない。仕事が好きだったら、弟子入りして、本当の

「マイスターシャフト」(職人親方の身分)



をもらったほうがいい。あなた方はお子さんの大事な素質をみたら、

「大丈夫だ」

と言って、それを中心にしてグーッと肯定していきなさい。数学ができなくて零点だつて構わないんだ。また、数学ができる者は数学だけで行けとか。とにかく、その台風の目みtainな中心をしつかりもつていれば、これは回転する。中心のないものはダメです。台風の目は静けさのうちにも凄い力をもっている。これが無の世界です。台風の目は無に通ずる。

●神はなんじの中にいませり

11 エホバ、イスラエルの聖者イスラエルを造れるもの如此いたもう。

曇みかけて繰り返し波状的に言っている。

後きたらんとすることを我にとえ、またわが子女とわが手の工とにつきて汝等われに言わせよ。12 われ地をつくりてそのうえに人を創造せり。われ自らの手をもて天をのべ、その万象をさだめたり。13 われ義をもて彼のクロスを起こせり。

私がクロスを起こしたのは神の義のわざであるぞと。

われそのすべての道をなおくせん。彼はわが邑をたてわが俘囚を価のためならず報いのためならずして釈すべし。

そうなんです、無条件に釈す。

これ万軍のエホバの聖言なり。

凄いね。もう、その角度からだつたら、あなた方はこの聖書を楽に読める。

14 エホバ如此いたもう、エジプトがはたらきて得しものとエテオピアがあきないて得しものとはなんじの有とならん。また身のたけ高きセバ人きたりくだりて汝にしたがい縄につながれて降り、なんじのまえに伏しなんじに祈りていわん、

エジプトでもエテオピアでもセバでもみな、イスラエルよりも強かつたかと思うと、どつこいこれはみなお前に従うものになるぞということですよ。

まことに神はなんじの中にいませり、このほかに神なし一人もなしと。

みんながそう言うようなことになるぞと。これは大事なことです。

「お前イスラエル・ヤコブの中に神さまがいたということが分かった、その他にひとりも神さまがいまいということが分かったと彼等は言うぞ」

ということですよ。お前たちは神さま中心に生きている、神中心の民だということです。

日本の国旗は太陽を中心になっている、世界に冠たる国旗です。

「心に太陽を持て」



という。私たちの魂が火のごとく、太陽の如く、キリストという義の炎がその存在の中心にあれば、影がなくなる。罪咎は雲散霧消してしまう。

「汝の中に神が在^{いま}したということが分かった」

「お前の中にキリストが生きていらつしやるということが分かった」

という。それが証者となることです。証者とは、キリストが神の子であることをただ宣べ伝えたってダメなんです。その人自身の実存が、姿が、生活がキリストを中心にして動いている。破れ器の中に光るものがあつたという。それを信という。

「信仰」の「仰」の字はいらん。いつまでも仰いでいるからダメなんだ。言葉というのは、真理に即して変遷していかなければダメですよ、いつまでも固守していたら。「信」とは、神の言が人となったということ。私たちには、キリストという言が私たちの人となった。即ち、

「汝のうちに神あり」

というのは、それが本当の信の姿であつたということです。これが一如の姿です。一如とというのは精神統一して一如になるのではない。贖われたる破れ器の中に、

「お前は心配するな、私がお前のまん中に入っているぞ」

と。あるいは逆に、

「お前は完全に私が包んでしまっているぞ」

ということです。

「われ汝のうちに、汝わがうちに」

というのがこのことです。パウロが書翰の中で164回同じようなことを言っているという。これはダイスマンが数えた。パウロは「信仰」という言葉を使っても、仰ぐのではないんだ。しよつちゅう

「キリストが私の中に」

と言っている。ゲーテが、

「成り上がったもの(ゲボルデン)はダメだ。常に生成展開(インマ・ベルデン)せよ」

と言った。地上では未完成交響楽がいいんです。地上で完成したらお終いだ。天界で完成する。限りなく展開する。地上ではみな三日月でいい。満月を望みながら、

「満月を懐く三日月」

として進んでいく。しかし、そこには完全性というものが質的には来ているから、いわゆる理想主義でも、いわゆる浪漫主義でもない。

●一極絶対

¹⁵ 救いをほどこし給うイスラエルの神よ、まことに汝はかくれています神なり。

45章の15節が中心です。この



「かくれています神」

を本当に捕まえたのは、何といつても、キリストです。マタイ伝6章に、

「汝が見られんために己が義を人の前にて行わぬように心せよ。然らずば、天にいます汝らの父より報を得じ。²さらば施済をなすとき、偽善者が人に崇められんとて会堂や街にて為すごとく、己が前にラッパを鳴らすな。誠に汝らに告ぐ、彼らは既にその報を得たり。³汝は施済をなすとき、右の手のなすことを左の手に知らすな。⁴是はその施済の隠れん為なり。然らば隠れたるに見たもう汝の父は報い給わん。」(マタイ6:1~4)

「右の手のなすことを左の手に知らすな」

という。素晴らしい言葉ですね。右手があれば、みな左手がある。みなそれを意識している。左手があつても、もう左手は意識しない。意識しないときに初めて「左の手に知らすな」ということが実践できる。左の手を意識したらダメなんです。だから、両手がありながら自分は隻手であるということ。その時の隻手は右であつても左であつてもいい。これを

「一極絶対」

という。一極絶対の世界に入ると、両極をもちながら一極絶対になる。そのような生き方をしろということです。そうすると、一つのことに打ち込んで、全心をそこに集中する。忙しい時は、いろいろな仕事が行進して普通は閉口してしまふ。それが私は閉口しない。一つをやっているときには、もう他のことは忘れていゝる。それでうろたえない。

●隠れたるに在す汝の父

「⁵なんじら祈るとき、偽善者の如くあらざれ。彼らは人に顕さんとて、会堂や大路の角に立ちて祈ることを好む。誠に汝らに告ぐ、かれらは既にその報を得たり。⁶なんじは祈るとき、己が部屋にいり、戸を閉じて、隠れたるに在す汝の父に祈れ。さらば隠れたるに見給うなんじの父は報い給わん。」(マタイ6:5~6)

キリストというのは非常に神秘的なひとだ。一面、静かなんだ。

これはちよつと例が違いますけれども、

「²²わが民よゆけ、なんじの室にいり汝のうしろの戸をとじて忿怒のすぎゆくまで暫時かくるべし。²¹視よエホバはその処をいでて地にすむものの不義をただしたまわん。地はその上なる血をあらわにして殺されたるものをまた掩わざるべし。」(イザヤ26:20~21)

とある。

「己が部屋にいり、戸を閉じて、隠れたるに在す汝の父に祈れ」

とある。祈る時はいつも「戸を閉じて、隠れたるに在す汝の父に祈る」祈り方ばかりせよ、



なんてことをキリストは言っているのではない。しかし、一人で祈るときはとにかく――戸を閉じなくてもいいよ。早天祈祷が好きな人は、皆がいらないような所で静かに祈る。夜型の人は深夜祈祷でもいい。電車の中はやかましい。しかし、目をつぶって釣り草にぶらさがりながら祈る――目をつぶるということが「戸を閉じて」ということです。祈るときには目をつぶっているね、あれは「戸を閉じて」と同じことです。現象界は見えないで、本体界を見て祈られる。目を閉じて霊眼をもつてキリストに、神さまの世界に向かっている。

「隠れたるに在す汝の父」

という。神さまは現象界からは隠れている。人の中に――ちよつと見ると分らないけれども――その人の中に神さまは隠れていたもう。非常に内的な神秘の世界です。

そればかりではない。キリストは霊界から現れてきました。始めは隠れていたが、霊界から降臨してきた。ナザレのイエスとして、大工の子として現れた。これは非常に露^{あらわ}なんだ。キリストは啓示的存在なんだ。啓示的存在で露^{あらわ}なだけども、露でありながら、神さまはこの露な姿の中に隠れている。一番凄い隠し方をしてるわけです。だから、本当に神を見ていないから、このキリストにおいてみな蹟く。

ところが、この露なキリストにおいて隠れたる神を見たのが、マルコ伝5章にある悪霊です。悪霊は霊の世界が分かるから、

「あなたは神の子だ」

と言った。すると、キリストは

「私を現すな」

と言われた。証者というのは、ただ口先ばかりで言っている者のことではない。

花を見て、太陽の光を見ているひとは隠れたる光を見ているわけです。太陽の光が変質変貌してこの花に現れている。光が花の青色に、赤色に現れる。無色透明の太陽の光がその中に隠れている。だから、これは光沢をもっている。なぜ赤が光沢をもっているか、なぜ青が光沢をもっているか、白が光をもっているか、これはみな無色の光がいろいろな色といういろいろな形に現れている。これが

「花は太陽の光の現象体である」

ということ。しかし、太陽の光は隠れてしまっている。そういうのが、

「隠れて在す神」

ということ。そういうような意味において、自分たちはキリストの、キリスト化された化身^{けしん}である。

●反対の中に隠されている

「隠れて在す^{いま}」ということには、もう一つ別な意味がある。ルターの言葉にこういうのがある。



「善は悪の下に隠され、生命は死の下に隠され、愛は憎しみの下に隠され、栄光は恥辱の下に隠され、天は地獄の下に隠され、叡智は無知の下に隠され、義は罪の下に隠され、力は弱さの下に隠されている。」

さすがはルターだ。その反対のものの中に隠されているという。

「生命は死の下に隠されている」

というのは、我々の信仰の世界で一番大事な消息です。キリストの十字架の死のことです。キリストは死んだかと思ったらどっこい、甦っていらつしやいました。十字架上で

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」

と叫んで血を流したキリスト。墓に葬られて、みな悲しんだり、弟子は散ってしまったり。ところが、この死の身体のキリストの中には実は生命が隠されてあった。

「生命は死の下に隠されている」

ことをはつきり実証されたのはキリストだけです。そして、霊体として甦ってこられた。無限は無の下に隠されてある。「何者でもない」という。これもキリストです。

「私は何でもない。なぜ私を善いと言うか」

と仰った。

親鸞は「悪人正機」と言った。救いは悪の下に隠されているわけです。我々は罪びとです。悪の下に善が隠されている。これを突き抜けると、これを否定してかかるから、そうすると善が現れてくる。そういう意味でもって、こう言っているわけです。

「愛は憎しみの下に隠されている」

という。愛憎という。ヘタすると、愛の下に憎しみが隠されたりする。私たちの自然現象としては、敵を嫌う。「あの野郎」なんて思う。そういう衝動がひっくり返る。「その下に隠されている」というのはそういうことです。死生の転換、愛憎の転換です。

「栄光は恥辱の下に隠されている」

と。神のために、キリストのために恥辱を担うところには栄光がある。

「天は地獄の下に隠されている」

この世は地獄的な所です。あるいは、煉獄と言ってもいい。しかし、キリストが在るところにはそこに天国が隠されている。

だから、要するに、キリストを受けるところ、生命のあるところ、十字架を本当に受けつついるところには、ルターが言った言葉の真義が受けとられてくる。

「憎らしいと思ったが、いや、敵を本当に愛するようになった」

と。相手を受くとは相手を助けることです。

「私を憎む人は、いいよ、私を憎んでも。私はそれを全部受けとってやるよ」

と祈っている。それは、憎しみを受けとりながら、愛がそこに隠されているわけです。みなそういうことで、キリストの死んで生きた霊を受けとっているところは、みなひつ

くり返る。これが「隠されて」いるところの姿です。隠れたる姿です。これを「隠身^{かくりみ}」という。我々はキリストの隠身にならなくてはいいかん。キリストを内に宿し隠しているところの人です。しかしながら、時あつてか、それは顕然として現れます。しょつちゅう隠れているわけではない。

「燈火を台の下に置くものか、台の上に置く」

という。

ルターが一番言いたかったのは、

「審判の下に恩恵が隠されている」

ということです。

「神の審判は恵みの別な現れである。審判即恩恵である。だから、審判を喜ぶ。神

さまに裁かれることを喜ぶ。自分が滅ぼされるとキリストの恵みがやってきた」

とまで彼は言ってます。

「神の怒りは愛の別な表れである」

とは、これもルターの言葉です。怒りは、審判は一面において義の表れです。義と愛は対立していない、即している。愛が隠されているところの怒りなんです。父母が子供を叱るときにも、憎らしくて叱るのではない。

「そういうことをしてはいかんよ」

とは、愛すればこそその怒りなんです。それを言わないで、

「まあ、いいよ、いいよ」

なんてやっているから、ドラ息子・娘ができる。ダメだよ、それでは。怒の中に愛が隠されている。審判は恩恵である。神さまに審かれることは恵みである。神さまはどこまでも、

「わが故に汝を赦す。わが故に汝を救う」

という。こちら側の故ではない。

「神さまの故に」

ということですよ。この「故に」は原因であり目的である。イザヤ書のあの言葉は大事な言葉です。

●平伏しの無の実存

私たちはそのような人生なんです。こんなことはどこで一体言われているんですか。イザヤ書をもっとしつかり読まなくては。

「預言書を読んで、私は愛国が分かった。本当の愛国心は預言書によって分かった」

と内村先生が言った。いわゆる国粹的な愛国とは違う。だからこそ、内村先生は、

「もつこんな国には愛想をつかした」

と逆説的な言葉を言った。藤井先生は、



「日本よ、滅びよ」

なんて言ってしまった。日本の在り方は憤慨に絶えない。二人とも憤死したようなものだ。私も日本人ですから、その一端を担って、神さまの前に平伏して行かなければならない。その平伏しの無的実存において、どこまでも本当の戦いをしていかないかね。

自分の全的否定は、これはまた逆に全的肯定になっていきます。皆さん一人ひとりの運命環境はみな別々です。それは神さまがそこに置きたもうたから。そして、そのようにしてまた一人ひとりを展開させたもう。神の顧みは決して比較ではない。一人ひとりに対して絶対的な角度と内容をもつて神さまは顧みておられる。

「何だか知らないけれども、神さまの顧みは本当に正しいんだ、本当の愛なんだ」と、それで突き進んで行く。そうしたらもう、グングン展開していく。世の中に無駄なものはない。毛虫だってそうなんだ。良寛さんもシュヴァイツァーさんも虫ひとつ殺さなかつたという。みなそれぞれ存在の意味がある。

中世のエックハルトという神秘家が、

「神は超存在的な非存在である」

と言った。存在を越えたところの非存在であるという。神さまは私たちには端倪すべからざるところの隠された神である、という角度から言っている。

「私は無(ニヒツ)に於けるにあらずんば、いかなるものに於ても平安を見いだしたことがない」

という。無です。

「無でなければ本当の平安は、私はいかなるものにも発見したことがない」

という。本当の無の世界にいくと、これが平安である。

また、ルターの言葉に、

「捕らわれた者のみが自由になり、貧しき者のみが豊かになり、弱き者のみが強くなり、謙虚なる者のみが高められ、空なる者のみが満たされ、無なる者のみが有となる」

とある。これはルターの聖書の註解の中の

『隠れたる神』(デウス・アブスコンデートス)

のところに出てくる言葉です。

「捕らわれた者のみが自由である」

ということとは、

「キリストに本当に捕らわれた者だけが本当の自由だ」ということです。パウロはキリストに捕らわれた者です。

「我はキリストの囚人である、僕である」

と言った。僕はそうなんです。主人の言うことに「はい、はい」と言っていていくのが僕なんだ。主人の命令を体现する。主人と言ったって、相手が絶対者だから、そこが本当



に自由である。何ものにも依存しない。

「貧しき者のみが豊かである」

と。そうです。

「幸いなるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり」

という。

「貧しき人は天国的な豊かな世界に入ってしまったているぞ」

ということです。

「弱き者のみが強くなる」

と。パウロが、

「我弱きときに強し。無力なるときにもの凄い力がきた」

と言っている。これはみなキリストの聖霊です。この転換点は、転換の焦点は十字架です。そこでグーツとひっくり返る。

コリント後書6章に、

「⁸また^{はすかしめ}光榮と^{あしきこえ}恥辱と^{よきこえ}惡名と美名とによりて表す。我らは人を惑わす者の如くなれども^{まこと}真、⁹人に知られぬ者の如くなれども人に知られ、死なんとする者の如くなれども、視よ、生ける者、^{こころ}懲さるる者の如くなれども殺されず、¹⁰憂うる者の如くなれども常に喜び、貧しき者の如くなれども多くの人を富ませ、何も有^もたぬ者の如くなれども凡ての物を有てり。」(コリント後6:8~10)

とある。無一物無尽蔵の世界である。そして、

「自分は一切の秘訣を得たり。運命、環境、情況がどうであれ、結構である」

とパウロは言っている。ピリピ書4章に書いてある。

「¹¹われ^{ともしき}窮乏によりて之を言うにあらず、我は如何なる^{さか}状に居るとも、足ることを学びたればなり。¹²我は^{いやしき}卑賤におる道を知り、富に居る道を知る。また飽くことにも、飢うることに、富むことにも、^{とも}乏しき事にも、一切の秘訣を得たり。¹³我を強くし給う者によりて、凡ての事をなし得るなり。」(ピリピ4:11~13)

いやはや、もう、凱歌をあげているね。どのような事態に対しても「どっこい」という世界である。それは、仏教でもいろいろなのがあるけれども、このキリスト道の世界のパウロが握っているところは本当に凄いよ。パウロさんは、またその点でよく読んでください。彼がいるので、キリスト道は絶対に滅びない。もちろん、パウロの中にキリストがいるからです。パウロを通してキリストが自在のことを仰っている。もの凄いドラマティックな構造であると同時に、もの凄い有機的な構造です。全体がもの凄いハーモニーの世界です。だから、パウロはローマ書8章の終りの方で

「勝ち得てあまりあり」



と絶叫している。

『³⁵我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ、患難か、苦難か、迫害か、飢か、裸か、危険か、剣か。³⁶録して『汝のために我らは、終日、殺されて屠らるべき羊の如きものと為られたり』とあるが如し。³⁷然れど凡てこれらの事の中にありても、我らを愛したもう者に頼り、勝ち得て余りあり。³⁸われ確く信ず、死も生命も、御使も、権威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、³⁹高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。』(ロマ8・35)

とある。パウロはまた一面非常に繊細に子細にものを言います。

だから、大自然の如くなる。大自然、大宇宙の如くなる。大自然を心の世界で全存在に受けて表していたのがゲートという詩人です。「マクロコスモス」が彼において「ミクロコスモス」になって現れる。隠されています神さまは、隠れていても我々一人ひとりにおいて隠されながら露でありたもう。そのようにして、隠れたるが如く、露なるが如くにして現すのが証者ということです。これはしょうがない、私は一面的にものを言わないから。また、真理は決して一面的に把握できるものではないから。

●ただキリスト一切

イザヤ書45章にもどります。

²¹なんじらその道理をもちきたりて述べよ、また共にはかれ、此事をたれか上古より示したりや。誰かむかしより告げたりしや。此はわれエホバならずや、我のほかには神あることなし。われは義をおこない救いをほどこす神にして我のほかには神あることなし。

これも、義と救いとが同義語に使ってある。

²²地の極なるもろもろの人よ、なんじら我をおおぎのぞめ、然らばすくわれん。われは神にして他に神なければなり。²³われは己をさして誓いたり。この言はただしき口よりいでたれば反ることなし。

人間は誓ったってダメです。神さまは誓っても我々はヘタな誓いをするなどキリストは言っておられる。

すべての膝はわがまえに屈み、すべての舌はわれに誓いをたてん。²⁴人われに就いていわん正義と力とはエホバにのみありと。人々エホバにきたらん、すべてエホバにむかいて怒るものは恥をいだくべし。²⁵イスラエルの裔はエホバによりて義とせられ且つほこらん。

神さまを誇るんですよ、自分を誇つたらとんでもない。波状的に義のことを、救いのこ



とを非常に具体的に語っている。いろいろな現象において神さまが隠れていらつしやるが、私たちはキリストの隠身かくりみとなつて、時あつてかそれが自在に力を表す。全部、人助けのためです。自分のためではない。

「一切は人々のため。自分のためには何ものもない」

とはペスタロッチの言葉です。

イザヤ書45章14、15節は身につけてください。

「¹⁴エホバ如此かくいいたもう、……なんじのまえに伏しなんじに祈りていわん、まことに神はなんじの中にいませり、このほかに神なし一人もなしと。¹⁵救をほどこし給うイスラエルの神よ、まことに汝はかくれています神なり。」

それから44章22節。

「²²我なんじの愆とがを雲のごとくに消し、なんじの罪を霧のごとくにちらせり。なんじ我にかえれ、我なんじを贖あがないたればなり。」

現在も過去も未来も、私そのものが、自分そのものが――自分そのものが罪なんだから――これが雲散霧消して無とされて、キリストの無限無量が展開していく。これはいわゆる悟りの無ではない。間違えてはこまる。賜りたる無の世界だから。簡単に言えば、何ものでもないということです。無なんて言わなくなつていい。

「私は何ものでもありません。ただキリスト一切です」

と言う。

「主さまー」

と言えば、力がグーッとくるから。いいですか、いわゆる自意識はダメですよ。

魂の素晴らしい人のお母さんはみな立派でした。立派というのは、

「魂が素晴らしかった」

ということ。女性、一番大事なことは魂が素晴らしくなることです。それが第二の国民をつくる一番大事な土台なんです。家庭教育は学校教育よりも大事です。教育を学校に任せてはダメです。

我々一人ひとりが本当にキリストの火にならなければダメなんです。どんな嵐がきても、風が吹いても、雨がきても、運命環境いかにもあれ、このキリストの火は消えない。

